

将来への提言

第22回インカレ実行委員長 片岡由起子

インカレ実施規則第12条に従い、第22回インカレ主管者として「将来への提言」を記す。

1. 共存

ヒトがひとりでは生きてはいけないように、インカレもインカレだけでは生きてはいけない。

1-1. 開催地と

オリエンテーリングはそこに「森」があつてこそできる競技であり、当然のことながらその「森」には持ち主が存在する。これまでのインカレも、そして今回のインカレも、回覧板を回す、挨拶に行くといった基本的なことは行ったが、開催地の方々とのもつと血の通った関係があつてもよいと思う。

ショートの時に行つた市民向けの大会は、事前の準備不足から、芳ばしい実績を残すことはできなかつたが、運営自体にも、運営者の数的にも余裕があると思われる関東地区での開催時には、こういった事業を積極的に行ってはどうだろう。

インカレ自体とは直接関係のないような気もするが、競技人口の少ないスポーツである以上、「知らない人に理解してもらう」ことは重要であり、そんな地道な努力がもしかすると、遠く遠くで競技人口の増加（加盟員の増加 インカレ参加者の増加）につながつているかもしれない。

1-2. 大学生以外のオリエンティアと

今まで、一般併設クラスは存在したが、学生のおまけ的な印象が拭ききれなかつた（クラス分けが少ないので）ことや、インカレ自体が一般オリエンティアに対して閉鎖的であつたこと、などで参加者数はそう多くはなかつた。

やるなら経験も余裕もあると思われる今回のインカレで、と言うことで大々的に大学生以外のオリエンティア向け大会「日光オリエンテーリング2日間大会」を同時開催した。インカレ参加者数の減少による収入（学連の活動費となる）の減少対策であつたことも確かだが、それ以上に日光の素晴らしいテレインを堪能してほしい、学生の頑張りを応援してほしい、という思いがあつた。

クラスの充実に加え、事前の宣伝活動も充分だったので、若者からベテランの方まで、実に幅広い層の大勢のオリエンティアの方に参加していただくことができた。参加した方の反応も上々であった。「日光」という特殊な条件ゆえに可能だつたことかもしれないが、この関係が今後も続くことを願つてゐる。

残念なのは、「日光オリエンテーリング2日間大会」の表彰式に学生がほとんどいなかつたことだ。

1-3. スコードと

これまで、インカレ前走については、日本のトップエリートに個人的に依頼をし、インカレ前走での最終直前チェック、イベント演出などに利用してきた。

今回初めて、スコードとインカレ実行委員会という組織と組織の関係で協力していただいた。初めてだったので、というのは言い訳になるが、事前に充分な協議ができないままに当日に向かえてしまい、双方の認識の違いから、スコードの方々に不快な思いをさせてしまい、たいへん申し訳なかつた。

スコードには、たいへん有能な人材が揃つてゐるので、事前に充分な協議を行つた上で、多いに利用させていただくとよいと思う。

2. 次へ

運営は「ヒト」と「ヒト」とのつながり。

2-1. 「紙」も「ヒト」も利用しよう

インカレの反省書は、毎回残され、参考になることもたくさん書かれていると思う。しかしながら、反省書の多くはインカレが終わつてしまふと経つてから書かれている。記憶として頭のなかに存在していることも、つかれない現われない場合は多々あり、そういう記憶の多くは、反省書では触れられていないことと思う。「聞いてくれれば」何らかの回答を記憶の奥そこから引っぱってくることが可能だと思われるのでも、反省書を参考にすると供に、前任者に直接話を聞くのが一番である。幸いにも、現在は運営者のほとんど、責任者、チーフクラスにおいては全員がメールアドレスを取得している。面識がなくても、遠く離れていても、比較的聞き易いのではないだろうか。

2-2. 学生も「ヒト」、運営者も「ヒト」

マニュアルがあれば、それに従い機械的に運営することは可能で、かつそれなりの運営ができるであろう。しかし、そこに熱い何かをそいで、生きたインカレにして行くことは重要だと思う。運営に対する「自己の満足」のためではなく、「学生のために」熱い何かをそいでほしい。そして血の通つたインカレは、きっと学生にとって、印象深いインカレになるのではないか？

思いつくままに書いてきましたが…。今後のインカレにさらなる発展を期待しています。